

第261回山口西田読書会 2021年1月23日のプロトコル

第260回は1月16日に開催され、昨年2020年1月10日に逝去された山口進氏を偲んで、特別講座となった。山口氏の定席であった机上には蠟梅が生けられ、和やかに会が進行した。テキストは「人心の疑惑」「国文学史講話の序」「愚禿親鸞」であった。それぞれ『善の研究』執筆前・中・後に相当する随筆で、その間の境涯の深化の有無が問題となった。本日初めて末永さんと吉川さんが参加。

第261回は行武氏のプロトコルを中心に会が進行した。プロトコルに入る前に予めそれに関連した記述のある個所を講読した。

1. テキスト

『働くものから見るものへ』旧全集版 192頁6行目～同11行目（「働くもの」「二」第3段落終わりまで）。

2. テキスト要約

前には「親から子が生れた」ことに即して両者を統一するものが考えられていた。親の死は消滅である。それが同時に子の発生である。これを以前、親は自らが死ぬべく子を産むのであり、子は親の死を生きるべく生れる、何とかそのように理解した。ここではさらにそれが「矛盾概念の統一」であることの意味を考えたい。

親の死が子の生れることであるとしても、それだけでは矛盾を構成しない。しかし西田がこれを相矛盾する概念として捉えたのは、「創造作用」（194, 15）の如きものをそこに認めたからである。創造作用においてはまさに「死することが生れること」であり、「否定することが肯定すること」であり、それは「無にして有を成立せしめるもの」である。そうしてそれが「概念の生滅する場所の如きもの」と言われているのである。

テキストでは次いで「かかる矛盾の統一は如何にして積極的意義を得るであろうか」と述べられ、またしても「数理」から話が始められる。「質料的对象界が単に形式的なる」（188, 6）場合である。以前は色と数は同じように扱われていたが、188頁以降はその「形式」的なる点に着目し、数のみが扱われ、色は除外されている。さて「数理の世界」の根柢には「若干の仮定」があり、そこから「矛盾律」すなわち「矛盾的限制」によって一々の数理が必然的に組織されるが、「我々はそこに矛盾の統一なるものを見ることができると言うのである。また「数の対象界の統一せられるにも、その根柢に何等かの類概念がなければなるまい」とされる。

いくつか疑問が生ずる。第一に「矛盾律」が「矛盾的限制」に換言されていると解釈できる点である。矛盾律はAが同時に $\sim A$ であることを禁ずるという点でむしろ矛盾を許さないものであるのに、それが「矛盾的限制」とされ、そこに「矛盾の統一」を見ることができるとされている点である。第二に「相矛盾する二つの概念」を統一するのに「所謂類概念を以てすることもできない」（191, 15-192, 1）と言われているのに、ここでは「類概念がなければならない」とされている点である。

第一の点については197頁15行目から198頁1行目に「数の概念に於ては一般と特殊とが直に結合するが故に、矛盾的统一というものが考え得る」という記述が参考になる。この点においては色や空間についても同じことが言えるであろう。5は特殊でありながらそのまま数という一般概念である。同様にこの色（特殊）もそのまま色（一般）である。これを西田は「矛盾的统一」と言っているのである。それ故これは矛盾律を犯すという意味ではない。

第二の点については「数の対象世界」には「類概念」があるが、矛盾が深まればこうした「所謂類概念」を以て「相矛盾する二つの概念」（一般と特殊）を統一することはできない、さしあたりそのように理解することができるであろう。

